



「良書ご案内」

書籍名	無人島のふたり	著者名	山本 文緒
出版社名	新潮社	発行年月	2022年10月

NHKラジオ「高橋源一郎の飛ぶ教室」が本書との出会いだ。
山本は2021年、突然ステージ4bのすい臓がんと診断され、その後厳しい抗がん剤治療を諦め、夫と話し合って緩和ケアを選ぶことになった。本書は、その人気作家の闘病記です。
現在、闘病記は有力なベストセラージャンルとして市民権を獲得している。2005年には初めて東京都中央図書館で「闘病記文庫」が設置され、以後鳥取県、山口県、城西大学と次々と開設された。多くの書店にも新しく「闘病記コーナー」が設けられている。

山本の余命は半年、抗がん剤治療を選んだとしても9か月というのが主治医の診たてだ。その時の心境を「突然20フィート超の大波に襲われ、ふたりで無人島に流されてしまった。」
「私の人生は充実したいい人生だった。58歳没はちょっと早いけど、短い人生だったというわけではない。」と作家らしくカッコをつけるが、そのあと直に「そんなに簡単に割り切れるかボケ！と神様に言いたい気持ちがする。」と本音を漏らしている。

なぜ人は闘病記を書くのか？「何も書き残したりせず、潔くこの世を去ればいいのに、ノートにボールペンでちまちま書いているあたりが何というか承認欲求を捨てきれない小者感がある。せめてこれを書くことをお別れの挨拶として許してください。」と山本は日記を書く意味を語る。

社会学者の門林道子は、闘病記を「大病を患った人がその体験、療養過程や、獲得した人生観などを綴った書物のジャンル」と定義している。

そのような闘病記を、なぜ私たちは読むのか？死に至る病に立ち向かう人が、苦しみ、もがき、うつにもなりながらも、「新たな自分」と出会い、神様とも折り合いをつける過程がなんとも神々しく感じる。読後は、逆に励まされたり、読む私たちにも必ず訪れる最後の時への覚悟を促されたり、また不思議なことに勇気を貰ったりする。

日本は今後多死社会を迎える。2015年に初めて死亡者は100万人を超え、2040年には170万人近い死亡者が推計されている。(厚生労働省…人口動態統計)

私たちの老後は、長寿化により思いのほか長くなり、自分と向き合う時間が増える。

つまり自分の将来の「死」に向き合う時間が大量にもたらされたのだ。

死に関する専門の宗教は甚だ頼りなく、私たちは死生観を闘病記から学ぶことになりそうだ。

闘病中に山本は、自著「自転しながら公転する」(新潮文庫)が中央公論文芸賞を受賞する。

よかった！

岩城

編
集
後
記

先日の統一地方選、低投票率と無投票の課題は人口減少や高齢化が絡んでいて先行き不安?と思いませんか？
現在、8期介護保険事業計画は最終年度、各市町村は、昨年度中に計画作成に向けた各種調査を実施、そこから読める在宅介護ニーズと訪問診療等の医療ニーズ、今年7月頃に提示される国の基本指針案を加味し、本格的に各市町村における9期計画の策定が進む。計画のキーマンは特養入所者の93%を占める、後期高齢者人口(75歳以上人口)である。

先日TVで75歳以上人口の減少自治体数の推移を5年毎に追いかけた話を、ネットで見つけたので披露すると2007→2012年では44自治体、2017→2022年では672自治体(既に40%近く)で減少、これを2035→2040年で見ると1,371自治体で減少し、全自治体の8割以上というから驚く。75歳以上人口割合の高い上位5府県は①秋田県19.8%、②高知県19%③山口県18.4%、島根県、岩手県と続く(2022年時点)高齢者数増はある限られたエリアだけと認識する。ならば対応策は?選挙も介護も保育も課題山積みですね 所在地:〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-87ビル2F 「どうする日本」 発行所:株式会社ライフデザイン研究所 Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067 編集人 伊藤

